

演目の解説

【国風歌楽】五節舞（ごせちまい）

その起源は、天武天皇（在位673～686）が吉野の離宮で琴を弾いておられると、天女が天降つて、「乙女ども、乙女さびすも唐玉を、袂にまきて、乙女さびすも」（大歌）の歌に合わせ、五度袖をひるがえして舞ったのをかたどつたものと言われています。平安時代には大嘗会や新嘗会で奏されましたが、南北朝以後戦乱のため廃絶され、現行のものは大正天皇即位式に用いるため新作されたものです。元来この舞は天皇即位式ごとに、当時の楽長（雅楽寮）が作舞したとも言われており、所作は一定ではありませんでした。現在の五節舞ではおすべらかしに十二単姿で舞っていますが、本日は和氣清麻呂公時代の天平装束姿で舞います。

【舞楽】胡蝶（こちょう）

源氏物語の巻の名にもなっているこの舞は、迦陵頻と対比して『てふはましてはかなきさまにとびたちて、やまぶきのませのもとにさきこぼれたる花のかげにまひいづる』と描写されています。

この曲は延喜6（906）年勅命に依り、山城守藤原忠房が作曲、舞は敦実親王の御作。銀色の天冠に山吹の造花を挿し、蝶の作り羽根を背負い、手に山吹の花を持って舞います。

【舞楽】白浜（ほうひん）

「白浜」という曲名は朝鮮半島の地名であったといわれていますが、確かなことは分からなくなっています。曲は伝来のものですが、舞はわが国で新たに作られました。哀調を帯びた、心にしみるような名曲です。装束は、近衛府の制服であった蛮絵装束です。曲の中ほどでひざまづき、片袖を脱ぎ、袖をひるがえしながら背中合せに、あるいは向い合わせに舞台を周ります。右方舞文舞の代表曲です。

【舞楽】拔頭（ばとう）

父を猛獣にかみ殺された息子が、その仇を討ち、喜んで山路を駆け下りたという西域の故事を舞にしたと言われ、髪をふり乱し、眉をつりあげた赤い面をつけ、毛ベリの襦袢装束に桴を持っています。

走舞の軽快さは、枕草子にも、”拔頭は髪ふりあげたる。まみなどはうとましけれど楽もなほいとおもしろし”と評されています。

【管弦】長慶子（ちょうげいし）太食調

平安時代の源博雅作曲といわれています。

舞を伴いませんが舞楽曲に分類されています。舞楽が終了し、退出を促す退出音声として必ず演奏されます。

◆ご来場・ご観覧にあたって◆

- ・体調の優れない方など、感染症の疑いのある方のご入場はお断りすることがあります。
- ・会場内では係員の指示に従っていただきます。
- ・駐車場はございますが限りがございますので、なるべく公共交通機関を等を利用してお越しください。

【お問い合わせ先】
北九州雅楽振興後援会
TEL093-921-2292
(妙見神社内)
<http://www.myouken.or.jp>

